

新制作

会報 No.56

発行
2008年12月15日

編集・発行人
瀧 徹

発行 新制作協会 〒110-0013 東京都台東区入谷2-4-2 増田ビル202 Tel.03-5603-8350 Fax.03-5603-8360
<http://www.shinseisaku.jp/>



2008年・第72回新制作展

第72回 新制作展 新会員・受賞者紹介

新会員

絵画部



石倉郁美

◆二十余年前、初入選のレセプションでは緊張で棒立ちになっていました。猪熊先生を始め才気溢れる新制作の作家の作品は刺激的で、唾を飲んで会場を廻ったものでした。毎年先生方からの厳しいご批評を重ねて一步一步自分の絵の世界を築かせて頂けて、感謝の気持ちで一杯です。国立新美術館の壁に会員として恥じない作品が並べられるか心配ですが、今後ともよろしくご指導お願い申し上げます。

◆一九四六年群馬県生まれ。一九六九年群馬大学教育学部美術科卒業。一九八五年第49回新制作展初入選。第64回、70回新制作展新作家賞受賞。



岸 宏士

◆このたびは、新制作協会会員に推挙い

ただきまして本当にありがとうございます。

私としては、自分の目や心で感じた風景をどう画面上に表現するかを考え、日々努力をしております。失敗も多いかと思いますが、これからもご指導のほどよろしくお願いいたします。

◆一九三五年神奈川県生まれ。千葉大学。一九六八年第32回新制作展初入選。第33回新制作展新作家賞受賞。



永田由利子

◆個展を中心に発表してきましたが、新制作展に出品したい思いが強く、遅い出発となりました。初出品・初受賞を頂きながら、その後、絵を深く描いていくことに苦心しました。受験生のような高揚感と緊張感で描いていました。

この度、会員に推挙頂きありがとうございます。この新しい環境を新鮮な緊張感として、自分がさらに自分らしく展開出来たらと思っています。

◆一九五一年東京都生まれ。東京芸術大学大学院油画技法・材料研究室修了。二〇〇〇年第64回新制作展初入選・新作家賞受賞。第70回展70回記念賞受賞。

彫刻部



小柳 力

◆学生時代、都美術館の新制作展に魅了されて以来出品を続けてきた。厳しくも素晴らしい彫刻家の皆様との出会いが継続のエネルギーでもあった。この度、会員推挙を頂き感無量のものがある。これまでもそうであったように、今後とも生まれ育ったこの地で、この地に産する素材を相手にコツコツ不器用に制作に励んでいくのみです。変わらぬご指導ご鞭撻をお願いいたします。

◆一九四一年秋田県生まれ。一九六四年秋田大学教育学部美術科卒業。一九六二年第26回新制作展初入選。第60回、71回新制作展新作家賞受賞。



椎名良一

◆石は存在感がある。圧倒的に強い。「彫れるものなら彫ってみろ」そう言ってるようだ。エスキースは出来ている。スミは入れた。しかし、ノミが入らない。「彫らない方が美しいな」。石屋さんが割った割口がキレイだ、雲母も光っている。夜空の星々のような。何億年かぶりに口を開き呼吸してるのか……勝手な想像が頭に巡る。負けそうになる。石とだけで

72回展点描



はなく自分との戦いでもある。困難と課題が次々生まれる。目前に「石」がある。「さあ、どうする」……。

厳しい歳月を経て制作し出品を続けてまいりましたが、この度、会員として迎え入れて頂きましたこと、ひとえに会の懐の深さに感謝するばかりです。これからも、悩み苦しみ圧倒されながら石彫を続けるでしょう。益々気を引き締め直していきたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。

◆一九五〇年千葉県生まれ。一九七五年東京造形大学彫刻科卒業。一九七四年第38回新制作展初入選。第70回、71回新制作展新作家賞受賞。



ひらた よしゆき
平田 義之

◆この度、会員推挙をいただき、新たなスタートラインに立った今、大きな喜びの中にも責任の重さを感じつつ、「今年よりも良い作品を！」と自分に言い聞かせ次の仕事の石塊を彫り刻んでいます。今後、素材と向き合い、じっくり時間をかけて対話をし、様々な可能性を探りながら自身の造形を深化させていきたいと思っています。

どうぞよろしくお願いたします。

◆一九七一年長野県生まれ。一九九四年東海大学教養学部芸術学科美術学課程卒業。一九九五年第59回新制作展初入選。

第70回展70回記念賞、71回展新作家賞受賞。



もり ともゆき
森 智之

◆この度は会員に推挙していただき、ありがとうございます。私にとって新制作展は、自分の足りないところ、良いところを照らしだしてくれる場であり、多くの方々との出会いの場でありました。

創り続けられる環境の中にいることができたのも、先生方や先輩、そして家族の支えがあつてのことと感謝の気持ちでいっぱいです。自分を育ててくれた新制作協会の発展のために少しでも貢献できるように、また彫刻への情熱と憧れを絶やすことなく、未だ見ぬ新たな創造の世界を求め、努力していきます。

◆一九六八年岐阜県生まれ。一九九四年金沢美術工芸大学大学院美術工芸研究科絵画・彫刻専攻修了。一九九三年第57回新制作展初入選。第67回、71回新制作展新作家賞受賞。

スペースデザイン部



しまだ みわ
島田 美和

◆この度は、会員に推挙して頂き、大変うれしく思っております。ありがとうございます。

ございました。これからは自分の中に新しい風を吹かせ、それを作品に生かしていきたいと思っております。今後ともご指導、よろしくお願いたします。

◆一九七四年神奈川県生まれ。武蔵野美術大学。一九九九年第63回新制作展初入選・新作家賞受賞。第70回展70回記念賞受賞。

新作家賞

絵画部

- 小野仁良(福島) 曾根三千代(香川)
- 高堀正俊(神奈川) 竹本義子(広島)
- 田中亮平(兵庫) 田村研一(京都)
- 辻井久子(大阪) 手嶋醇子(愛知)
- 永井 優(東京) 中崎真佐子(大阪)
- 彫刻部
- 池田史志(兵庫) 小川 誠(北海道)
- 織本 亘(埼玉) 玉柴広芳(沖縄)
- 細田修己(北海道) 本田悦久(東京)
- 渡辺尋志(福島)
- スペースデザイン部
- 立花克樹(宮崎) 福井一真(京都)
- 岩松美佐子(東京)



伊勢正義



審査・陳列

● 絵画部審査報告

絵画部 中村貞夫

第72回新制作展絵画部の審査の状況を報告いたします。

国立新美術館に移って2年目ですが、従来通り2日間の午前、午後に分けて審査が行われました。

応募点数は939点、応募者は380人で、昨年度に比べて点数は70点、人数は18人減りました。審査に携わっておりまして、作品のレベルがとて高くなってきたことを実感しました。いろいろ



々なチャレンジや試みがなされていることがよくわかりました。

展示会場のパネルのレイアウトを工夫して、入選点数を増やそう心がけましたが、一段掛けを守りましたので、今年も厳選でした。2点入選者が多くなれば、活気が増すと考え、それらの作品はあえて二段掛けを前提にして採りました。

入選者は258名、その内2点入選が15名でした。また、初入選者が40名で、その多くに新風を感じました。若い人たちの出品を奨励するためのデジタル画像による審査も別会場从今年から行われ、12点入選しました。

出品者の皆様に続けて応募して頂きやすい形を色々と模索、検討しています。



新制作の会報やその他の広報に留意していただいて、よろしくご対応の程お願いいたします。

ますますのご健筆を祈ります。



● 彫刻部審査陳列感想

彫刻部 渡辺隆根

昨年度より30点ばかり少ない応募点数であったが、昨年は国立新美術館開館の初めての展示ということで出品が増加したようです。今年度は通常の新作をめぐらす作家達の出品だと思えます。彫刻部では、70回展の受賞作家を、71回展ではシード作家として無鑑査とするという企画をたて、72回展においても継続しました。結果としては、71回展の受賞者はシード作家が何名か含まれ、72回展では4



名の会員推挙、7名の受賞者のうち2名がシード作家でした。作家達の新作への熱い思いが伝わってきます。初入選が11点、再入選は75点ですが、2点入選は例年より多く、また総じて出品作品の質の高さと熱気は感じられます。新会場2年目という展示空間の理解と共に、各作家が自然な形で力を込めた作品が集まったようです。一般鑑賞者からも見応えがあったという感想を多く聞きます。会場入り口からの展望は、ABCに別れる展示スペースが一望に目に入り、三つの空間の中心を充実させたようにも見える構成は悪くない。壁側がきれいに並びすぎているように見えること、スポットの届かない部分の天井のライトのルックスを上げるなど、会場使用の試行錯誤は始まったばかりです。野外展示場も空間に余裕がみられ、落ち着いています。



ただ、室内展示場から野外展示場への誘導はもう一つ工夫が必要に思われます。

●審査陳列報告

スペースデザイン部 谷 浩二

昨年は国立新美術館での初めての展示で、それなりに準備はしていたものの、すっきりとした展示にはならなかった。一般観覧者からも「スペースデザインなのに展示がデザインされていない」という声が聞こえてきた。陳列関係者は一様に都美術館では作れなかった多様な見せ方を打ち出す方向に意識が傾いていたとはいえ、それは言い訳だと一蹴するかのようなの言葉には少なからずショックを受けた。原因が陳列点数の問題であることは分かっていたが、応募点数の多さに麻痺していたのかも知れない。

これらを反省点として、今年は早くから陳列企画委員会が入念なシミュレーションを行い、展示分類ごとの適正陳列点数を割り出した。その後会員の同意も得られ、この数字を目標として審査が進められた。搬入受付係の努力や審査進行係の機転、谷中田美術の手際よい作業等にも助けられ、審査会場が分散していたにも拘らず、公平かつ厳正なる審査が遂行できた。見直し動議の協議を入れても定刻前に終了した。結果は応募点数79点、入選点数37点、入選率46.7%だった。入選点数は昨年比18点減という厳しさだが、やはり限られた展示空間を鑑みれば

やむを得ない。残念ながら選外となった応募者も奮起して再度挑戦してほしい。

陳列作業でも新たな試みとしてプロック割りとチーフ制を導入した。また、今回は休憩室の壁面に陳列できたことも大きい。陳列は立体模型で周到に計画された配置図通りに実施され、不評だった中空吊りも含め、計73点が問題なく納まった。結果、授賞選考に十分な時間をもつことができた。陳列に携わったすべての人に感謝したい。会期初日には観覧者から「今年は観やすくていいね」という言葉も聞けた。肩の荷が降りた瞬間だった。

しかし課題は残されている。インスタレーションや暗室展示への対応だ。これらはスペースデザイン部門の特色でもあり、応募規定も含めた綿密な検討が必要だろう。来年に期待したい。ともあれ、部門を越えて協力し合い、回を重ねるごとに新作らしいより良い展覧会に向かっていると報告できる嬉しさを感じた。



新制作 生みの親 育ての親 (1)

絵画部会員 荒井茂雄

皆さん、こんにちは。新制作派協会の第12回展(昭和23年)から出品している絵画部の荒井茂雄です。

昨年12月中頃、会報編集委員の3人のメンバー、SD部・中野威さん、彫刻部・藤森民雄さん、絵画部・山口都さんが、私のアトリエを訪ねてこられ「最近、会員も多くなってきましたので、みんなが初心にかえるという意味でも、新制作が誕生した頃の創立会員の情熱、友情など、その辺のことを再認識することが大切ではないか」ということで、私に、会報にそのようなことを書いてくれないかという依頼を受けました。「私は戦後間もない第12回展からの出品者なものですから、特に戦前の新制作の事情などは知る由もありません」と答えたのですが、



アトリエにて 荒井茂雄

「創立会員の猪熊先生を通しての話ではないのです」と言われ、そういうことであれば、私も新制作の会員の一人として、自分を叱咤激励するためにもと思い、お引き受けすることにしました。

さて、引き受けはしたものの、私は本来事務的なこと(例えば物事を年号順に整理するなど)は大の苦手で、今回の話の進め方も行ったり戻ったりになつてしまふのではないかと思います……。

戦後間もなく、私は猪熊先生にお会いする機会に恵まれました。あの時の、何もかも新鮮に感じたことなどを、みんな書き留めておけばよかつたなあ……と今になって思つても、前述のようなわけで日記帳のようなものは一つもありません。そこで考えたのですが、いつの間にか手元に残っている、猪熊先生と同行した当時の写真や、先生のアトリエで開かれたパーティでみんなで楽しく騒いだ当時の写真などを、じっくりと気持ちを澄ませて見ていると、その頃のことを頭に浮かんできますので、それを素早くすくい上げて鮮度の落ちないうちに頭の濾過器を通して整えるという方法でいこうと思えます。

それでは、これから表題「新制作 生みの親 育ての親」の話に入ります。何といつても第1回展の図録からと思

い、手元にあつた第1号を開きました。その瞬間、創立会員の熱い思いが、1936年の風に乗つて「今」に広がつてきました。この第1回展の図録には「巻頭言」が掲載されています。前号会報にも紹介されていますので、皆さんもご承知のことと思います。

巻頭言に関して、猪熊先生が「巻頭言には歴史が書いてある」と、また伊勢先生は「巻頭言と規約で言うべきことは尽くされていると思うんです。巻頭言は非常に明確だから」と、『新制作五十年の展望』の座談会で発言されています。

巻頭言の次には、藤島武二先生のデッサン、油彩、それから創立会員9名の大作が連なつていて壯観です。

次に藤島先生が「帝國美術院改革に関する私見」と題して、政府の美術行政機関の帝國美術院を長文にわたり厳しく批判しておられ、その中で

「國家の庇護、温床の下では、美術家は其旺盛なるべき藝術的闘争心を鈍らせ、消極的な一定の境地に安住し易いものであつて、優秀なる美術家並に作品は斯かる微温的な境地から生まれて來ないのが通例である」と述べられ、さらに

「帝國美術院は本來の建前に立ち還り、廣義の美術行政機關として美術の全面的發達に寄與する所がなければならぬ。若し政府にして展覽會による美術を保護獎勵する意志があるならば、須らく各團體の獨立權を尊重して、各展覽會に於け

る優秀作品を買い上げ又はそれに授賞すればよいのである」

——と、結んでおられます。

行政のもとでは芸術は育たない、何の束縛もない自由の中にこそ「アート」があることを訴え、芸術本来の姿をもつ新制作派協会の誕生に心から熱いエールをおくつておられて、愛弟子を思う信条が溢れています。

その次の頁から、当時の美術評論家3名が、それぞれに新制作派協会の門出を祝福して讃辭を述べています。

◇新しい藝術精神 佐波 甫

「新しい藝術が生れる。君たちの手で君たちの力で、そして、君たちの若き時代の人々の自由な創造の精神によつて」と綴り、後尾には

「その新しき藝術精神が生活、作品兩行動を通じて流れるところに、つまり、生活行動に於ては倫理性モラルに、作品行動に於ては藝術性に、となるところに、新制作派の意義が始めて明確に浮び上るのである」——とまとめて、あたたかく応援をしてくれています。

* * *
◇色・色・色 富永惣一

「物質の色、人間の色、自然の色——こんなに面白いものはさうはないのである。無限に輻射してゐる色彩の構造は、汲みても盡きぬ頼もしい音調の様に福々しいのだ。僕は若い畫家達と此の福々しい色

の世界にすつぱり住込みたい。

あらゆる物體の本質を色で解決しやうと云ふのが畫家ならば畫家には凡ての物體に就いて一つの形がある前に色がなければならぬ筈である。形が物をつくる前に色が物體をつくつてゐるに違ひない。それなのに徒らに空疎な形を追ふ夢遊病者が如何に多い事か。形はいつのまにか『型』となつてゆく。感覺の貧困が『型』作りの名人を作るのだ。形の中に色を閉ぢこめる人々に我々は縁はないのだ。『形はない。色があるばかりだ』と放言したセザンヌは成程仲々の苦勞人である」と。さらに

「僕は新制作派協會の作家が皆津々たる若い生命に張切つて今度新しい仕事を始めると云ふ事を聞いて非常に嬉しかつた。此の人達は今日の問題を心得てゐる人々である事を知つてゐるからだ」と。

ひととき

72回展の新作家賞の賞牌は、彫刻部の一色邦彦氏に制作を依頼しました。



〈陽光〉(ブロンズ)

* * *
万物には色があり、その色が形をつくらせて存在している。心豊かなれば色がある。その色が個性という形を創るのではないでしようか。

富永氏は、フレッシュな感性をもつ新制作派の會員に、それぞれの色のある世界を期待して、21世紀を視野に新たなスタートをしたグループを祝しています。

◇新制作派協會の諸氏へ 荒城季夫

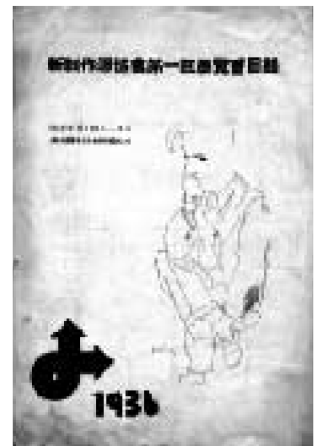
「誰も彼もが何か支配者に依據して畫家の地位を保たうとするのであつて、自から畫壇の沈滞した空氣を澆滅たるものにしてしようとする熱意を有つた者は殆どなかつた。だが、畫壇は果してこれであらうか」

——と憂い、最後に

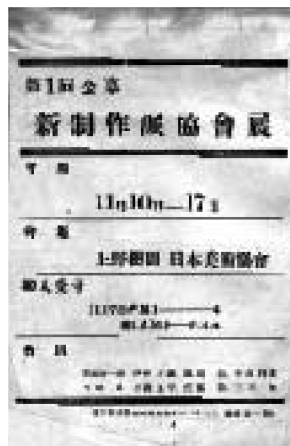
「しかし新興勢力の一部には漸く革新的な機運が動きつゝあるやうな氣配がある。新制作派協會は其中で最も組織的であり、態度がハッキリしてゐるやうだ。この協會が新しい時代の生活、モラル、繪畫に於ける内容と形式について、何かをプラスすることであらうことが期待される。

一言以て諸君の奮闘を希ひ、その元氣ある前途を祝福する次第である」と。

地位や名譽を得んがために官設展に愛着している当時の画壇の姿を憂い、純粹に団結して眞の芸術をめざす新制作派協會のメンバーに期待と祝福を述べています。



第1回展目録



第1回展ポスター



第2回展チケット



猪熊弦一郎渡欧送別会メニュー

評論家3氏から飾りのない心からの言葉をいただいているという事は、新制作創立會員の先生方が、生かす聞く耳を持つてゐる」と想えばこそこのことではないでしようか。

さて、今回はこれにてお別れいたします。この「新制作 生みの親育ての親」は、2011年春号までの予定と、会報

編集委員の皆さんから言われています。初めにも申しましたが、話が順序よく進まなかつたり、まとまらなかつたりになると思いますけれども、その辺のことも含めて今後もよろしくお願いたします。それでは09年春号の会報でまたお会いいたします。

Gallery Talk

● 絵画部 9月20日、田淵安一氏の特別展示に伴い、神奈川県立美術館館長の山梨俊夫氏による講演が行われ、多数の来場者が熱心に耳を傾けました。

【田淵安一氏略歴】1921年下関生まれ。45年東京大学文学部美術史料入学。47年新制作派協会展初出品。49年同展にて岡田賞受賞。51年渡仏。96年神奈川県立美術館にて個展。06年同美術館葉山館にて在仏55年の活動を顧みる大規模な回顧展。著作多数。



● 彫刻部 土谷氏は自身の彫刻を「優しい彫刻」と呼び、時代の中で自然と彫刻の間を往き来し、厳しい彫刻観からその優しい彫刻を生み出しました。同氏が逝って4年、その彫刻と人生の歩みを「立ち上がる自然―土谷武」と題し、親友であった加藤昭男氏・城田孝一郎氏監修の特別展示とし、9月21日には美術館3

階講堂でギャラリートーク「彫刻・土谷武の世界」を行い、いずれも盛況でした。



● スペースデザイン部 9月20日午後2時〜4時、SD部展示会場暗室にて、尾埜行男氏「日時計をつくる」佐伯和子氏「タペストリーをつくる」のテーマによる作品解説を行い、スペースデザインについて観覧者とともに語り合いました。



* 受賞作家展 *

72回展新作家賞受賞者による受賞作家展を左記のとおり開催いたします。開催初日にはオープニングパーティーも行います。皆さまのお出でをお待ちします。

絵画部

■ 会期 09年2月16日(日)〜21日(土)

■ 会場 銀座東和ギャラリー

☎ 03-3542-8662

彫刻部

■ 会期 09年2月16日(日)〜28日(土)

■ 会場 ギャラリーせいほう

☎ 03-3573-2468

スペースデザイン部

■ 会期 09年3月10日(火)〜15日(日)

■ 会場 建築会館ギャラリー

☎ 03-3456-2051

《お知らせ》

◇ 巡回展開催

* 2008新制作京都展

会期 08年10月21日(火)〜10月31日(金)

会場 京都市美術館

* 第72回新制作絵画展(名古屋)

会期 08年11月11日(火)〜11月16日(日)

会場 愛知県芸術文化センター

8階ギャラリー

* 第72回新制作絵画展(広島)

会期 08年11月25日(火)〜11月30日(日)

会場 広島県立美術館・県民ギャラリー

《伝言板》

◇ 絵画部協友推挙(入選15回以上)

景山 憲(香川)

◇ 新制作協会eメールアドレス

新制作協会事務所のeメールアドレス

は以下のとおりです。ご利用下さい。

webmaster@shinseisaku.jp

計報

▼ 田村興造氏(彫刻部会員)

二〇〇八年三月二十六日、逝去されました。享年八十四歳。

▼ 大桐國光氏(彫刻部会員)

二〇〇八年四月二十八日、逝去されました。享年八十二歳。

心よりご冥福をお祈りいたします。

あとがき

今回より荒井先生によるエッセイを連載します。「新制作の精神を、猪熊先生との関わりを通して、エピソードなどを交え柔らかい表現で…」とお願いしたところ、「新制作の精神は猪熊先生だけでは無いので」とのことです。表題となりました。無理難題を快く承諾して頂き、心より感謝いたしますとともに、次回以降の展開を楽しみにしております。(中野)

会報編集委員 絵画部・山口 都

彫刻部・藤森民雄 SD部・中野 威

(吉國写真室)